

・学業面1：学術と実務の隔たりを実感

大学院では、国や自治体の政策を分析する際に、歴史と他国の状況を視野に入れた考察が求められています。例えば私の研究対象である中国の対外政策と中国の国内政策に関しては、政策の転換点とみられる出来事があったとするならば、それよりもずっと前に国内問題とされる何かが隠されていたり、国際的に立場関係の問題が潜んでいたりします。1980年代から施行されている改革開放政策がその代表格で、文化大革命が国内経済成長に与える打撃を改善する目的と中ソ対立が深まる中で国際社会に活路を求める狙いが合わさっていると言えます。

このような分析手法は様々な国際問題に通用しますが、「状況を多角的に捉えること」と、「状況をよりよくする行動」との間に、隔たりを感じています。コロナ対策でよく挙げられるようになった台湾の対応ですが、市民の命を家族のように大切にしている政府関係者の姿は日本で大々的に報道されています。状況が違えば、対策自体も変わってくるため、正解というものはないのかもしれませんが、ただ、試行錯誤の過程で「明晰な状況認識に基づいた判断」ができるかどうか、今こそ問われている力だと感じています。台湾の対応が優れていることを言われているのも、蔡英文総統をはじめとする政府関係者はコロナに関する情報をリアルタイムに把握し、それを徹底的に政策に落とし込んでいる点にあると考えます。しかし、国や政府はさておき、自分を含む大学生はデータや最新情報に基づいた状況認識がまだまだ曖昧のように感じており、この意識の欠如が行動にも影響が出ているように思います。

・学業面2：対面しない大学間交流でティーチング・アシスタントとしての成長

今年度は私個人にとっても、私がティーチング・アシスタントを担当しているゼミの受講生にとっても、学業と研究を進めづらかった一年だったと思います。こうした中でも、大学間のゼミ交流を開催できたことは、これまでになかったありがたみを感じました。アシスタントを務める私にとって、例年は補助的な立場にしかすぎませんでした。今年は「集まらない」という状況を前提に行うことになっているため、どうしたら無事に開催されるようにサポートしたらいいのかを臨機応変に考えながら、提案したり行動したりすることができました。そうこうしているうちに、ゼミ全体に連帯意識のようなものが生まれたように感じています。アシスタントとしての成長ですが、自分の役割を考えながら行動する力が身に付いたのは確かですが、チームプレイの楽しさを対面しない環境で実感できたことが一番だったと思います。